価値の再発見❶

日本の海の民話 その多様性

飯倉義之（國學院大學文学部）

キーワード　民話、想像力、生活実感、生業と環境、海の怪異、伝播者

民話と地域と生活と

日本には海を舞台とする多くの民話がある。しかし民話の中で語られる海は一様ではない。豊かな海、怖い海、不思議な海、信仰される海、仕事場としての海、特に注目されない海……この多様さはなぜ生まれたのだろうか。まずは民話のある特徴に注目したい。

民話は空想的ではあるけれども、空想の産物ではない。まるで謎かけといった文章になってしまったが、実はこれは民話の重要な特徴である。民話においては動物が当たり前にことばを話し、人が簡単に生き返り、無尽蔵に富を生む宝物があり、鬼や化け物が出現するなど、現実世界では起こり得ない出来事が語られるという点では空想的である。しかしその空想も、現実世界の生活に根差した空想なのだ。

朝日新聞2024年6月17日付夕刊のコラム「ぷらっとラボ」に、国立遺伝学研究所の柴崎祥太特任研究員（数理生物学）らの研究グループの研究成果が紹介されている。柴崎氏らは民話のデータベースから16種類の動物を選び、民話の伝承地域と動物の生息域を比較したところ、その8割以上が一致するという結果が得られたという。

データを基に数量を示したという点でこの研究には大いに意義があるが、実は「民話に出てくる動物たちはその地域に生息する動物である」という見解は、民話研究においては以前から自明のことであった。人間の想像力はじつは無限ではなく、生活の中で見聞きしたことを基に展開する【注1】。したがって空想的な民話においても、見たことも聞いたこともないものは語られ得ないのだ。だから民話は常に身近な動物たちが登場し、富は大判小判や米俵や反物など、お決まりの物品で表わされるのである。民話は語り手と聞き手の生活を反映して作り上げられていると言ってよい。海の民話の多様性も、海と人との関係の多様性の反映なのである。

海辺に生きる人、海に生きる人

具体的な例を見てみよう。海辺に暮らす人たちと海に暮らす人たちとはイコールではない。海辺を生活の場としながらも、陸地での農業等を生業とする人たちは、実は漁業を生業とする人たち以上に多かった。そうした陸に暮らす人たちが伝えた海の民話は、日々利用する浜や磯を舞台としている。「蛸の足の八本目」という民話などはその典型だ。

ある老婆が磯に貝拾い（海藻摘み）に行くと、大きな蛸が岩場で居眠りをしている。婆はこっそり蛸の足を1本切り取って帰って食べた。翌日、磯に行くとまた蛸がいるのでまた足を切って帰って食べた。それから毎日1本ずつ足を切っては食べして8日目、蛸の最後の足を切ろうと近寄ると、蛸はすばやく婆に足を巻き付けて、そのまま海に潜って行ってしまった。欲張りは身を亡ぼすとはこのこと、という話である。足を食べるのが老婆ではなく猫だとする話や、8日目に婆（猫）が警戒していると蛸が手招き（足招き？）するので「その手は食わん」と答えるなど、笑話化していたりする例もある。

この話からは、陸の者にとって浜や磯の産物が、海から来る恵みとしてとらえられていることがうかがえる。と同時に、慣れた浜や磯でも油断があれば命を失いかねない場所だとして、その危険さが意識されていることもわかる。陸に生きる者にとって海は、富の源泉であると同時に、陸とは別のルールが支配する原則立ち入り禁止の異界なのである。

対して海村に生活し、海を生業の場とするのは、その日のうちに行って戻れる距離で操業する地付き（近海漁）の漁師や海女・海士たちである。彼ら彼女らの海の民話には、海がもたらす芳醇な恵みと、それと表裏一体の沖や海中の脅威とが語り込められている。

「船幽霊」の民話は、日本各地の漁師や船乗りに様々な形で伝えられている。特に漁師の語る「船幽霊」は、盆や大晦日ほか特定の日に漁に出ると、海で遭難した死者たちの乗る船に遭遇するというものだ。そうした船幽霊は生きた漁師を仲間にすべく「イナダ（柄杓）貸せ」などと声をかけてくる。この声を無視すれば船は沈み、またそれに応じて柄杓を貸すと、船幽霊が無数に増えた柄杓で船に海水を注ぎ入れ、やはり沈没してしまう。

伊勢の鳥羽・志摩地方の海女の伝承する「共潜き（トモカヅキ）」もまた、海で死んだ海女が化したものだという。アワビを採りに海に潜ると自分と同じ姿形の海女がいて、アワビを渡してきたり、よく採れる場所を教えてきたりするが、その誘いに乗ると命を取られるという。

かつて筆者が話を聞かせてもらった漁師さんは「海の中はカネが泳いでるようなもの。俺たちはそれを拾うだけ」と仰っていた。実にダイレクトな海の恵みへの感謝の言葉だ。と同時に、その恵みを「拾う」には常に危険が伴う。何かを間違えれば、海の恵みを拾う代わりにわが命を落としてしまうかもしれない。鳥羽・志摩のトモカヅキが「自分そっくり」と語られるのを思い出していただきたい。船幽霊もトモカヅキも、海で命を落とした漁師であり海女・海士とされる。偶然やタイミングによっては、死者となっていたのは自分かも知れない。「あの死者はわたし」なのだ。海を生業の場とした人たちの伝えた民話は、大きな富をもたらしてくれる海に生き、生かされつつも、いつその海に殺されるかもわからない、という緊張感がその根底にあるといえる。

海を行き来する人たち

さらに土地を離れて遠距離を行く海の生活者がいる。カツオやカジキなど特定の魚を追いかける遠洋漁師や、港を廻って物資を運ぶ船乗りが伝えた海の民話である。自宅に帰る機会は少なく、船上や港で日々を過ごしたこうした職業の人たちは広い世間の見聞を持っており、民話や民謡を広める役割を果たした。こうした人たちは伝播者と呼ばれる。

「猫と南瓜」という民話がある。ある男が宿で、猫が戸棚を開けて魚を盗むのを見る。宿の主人に告げると主人は猫を殺してしまう。翌年、男が同じ宿を訪ねると、時期外れのかぼちゃの煮物が出る。庭に勝手に生えたかぼちゃだと聞いて怪しんでかぼちゃの根を掘ってみるとなんと殺した猫の骨から生えており、そのかぼちゃは毒だった。猫の怨念恐ろしや、という話である。この話の主人公が、海沿いでは船頭、内陸部では薬売りとなっている例が多いのである。船頭や薬売りがこの話を広めたであろうことが推測できる。中には聞いた話ではなく、「これはこの俺の身に起きたことなんだが……」と、体験談を装って、話の登場人物に成り代わって語ることもあったに違いない。海路を縦横無尽に行き来した人たちは、外界から新規で珍奇な民話をもたらす役目が期待されていたのである。

このように生きる地域や職業によって、海の見え方も海との関係もそれぞれ異なる。そうしたそれぞれの生活の体験から民話が生まれ、語り継がれていく。海の民話の多様性からは、人と海とが多様な関わり合いをもっていたことが見えてくるのである。

【注1】体験や知識から生活を超えた空想を生み出せる人たちも存在する。それは詩人（芸能者）であり、また宗教者である。そうした想像力から生まれた民話も存在する。